續豫粟毛三編

下

へ遠13
1164
29

岐阜
街道
本文
海野信盛蔵書
特
13
1164
29

續膝栗毛三編下卷

東都　十返舍一九著

守山武佐とうちるて。相の宿清水ぶたれ
とゝ弱よいさりしたゝ日暮て。ゆさ見覚東
殊ほ見も労ましけれが。おもゝの宿をもとゞ稲て。
一夜の夢をむすびとゞんと。夢かりとりと見えのまくあ。
革籠を脊負て戻る男。あうを見て。こりや
まちがんぐ。とゞりじゃ。いく宿があらば

嘘乃
餅
ゆ
花
うた
樹
伝義
百堂

いつてきの
書を
堂寫
浪甫
青梁
杜宇

男　こりゃおのれ　あく　ゆど　ぢや　ぢの　やど　ぢや　てく。
たけが　ちまて　ありよる　ぢの　ちの　ちく　そちらんせ
小　るのんぐろけのかぐろせんよくさびまて。ほんとうさんどこ
でもいだ　だぐ　一夜　のこぐろ　ぢんあく　そちまつて　ぬくの
ぢや　ア　ぬくの　ぢ　そんなのらも　をおめくの　ぬい　男　てアこち
ぢ　ぢんせ　トつれてゆくんぢ　ちゆく　こぐろ　ぬ
小宮　ぬく　ぢ　ぢ　ア　ぢゆんれの　ぬ　ぢ　ぬ
ぢども　女房　ぢ　ぢ　ぢ

燒干がするぶやろ。琉球芋をと入れて焚うん。
サアアくおろさるいろうの祝き入れうとうんを
あがるなれ。あのいろうぶ。若地がるひうぶぞいふ
ぶやこれさるのうしそぶやあぶうや。扱系の枝あり
うとあるのさ。塩思るされ。いめくまるいとさいふぶうふ
ろうちらぶとんるふうをそねうればとそ。悔ぶまうん。
モをお邪ケるのぶら。聖の紙ずで是をあぶうそえる
せへトうねてはいうぶぶぶぶでんをぶうとあるいうらうげんの
ろうろとひろいてぶるうとと紙ふつそぶ。とんせそうちぶへう

中へ入れさるとうぶうぶぶでそれぶまるうとんそうれしと
ぶうさうるうとんせそきるとうさせんとうちぶのうひぎ
ぶそびそ。そうぶ。そうそぶ。ヤアアくおろ祝ぶやなぶえな
るのうそうぶるぶあぶうそへ。後ぶようん。ぴうとん
祝うを是ろうん。コリヤおまいぶうのるうるあれるされ
ヤ。ヤ。旅でハ人ら級りうて祝うへ。ぶう用ぶぶうら。
祝へ。新けておくぶいうとへがらひぶそうら。おめへろ
ろうく。新てくんるぶへ。それい遅惑ぶやろうん。モを
そうまるようん。麦の約仏檀の中へいを是て金まちよ。

コレ又さるさるおくさるんぽおそいうんせ。
ろいろ。ゑびやあく〳〵トつくびびんの赤らしをあけて。
あく汁やどんぶりれもどらの赤らしのところ〳〵さ
ひとるあの〳〵見とらんのあの白まあ〳〵やが見〳〵ところ〳〵さ見ひとるん。
ゑびなどみ垂西とこ〳〵ろ。すびーの蒸そびやとみぶら。伽羅
ぶろ〳〵さるやき。ゑ食のこ〳〵ろ〳〵もとて蒸のさるもるびひとん。
やびろ〳〵のるみて生蒸　ケチ　あんこ猫ぶそ　ぜんうん　めし　擬ぶ
あびろ〳〵ろ〳〵さく
ひとろるいさるん。コノ猫の擬ぶとぶらんてあるうひ
なんでもろいろん。ぶるめしめらんうぷ。ぶるりや
ふところのがうをめぶ。小便ろ見ろるそ。汁の中へ

ろ〳〵おちろ八　小八　ろ　さ　ろ　祈　モ　その小便のおちろ
汁ハ　ぶんぶ　イヤ　かさ　ぶんぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ろうをろうてあげよろん。サア〳〵おそなりまさ
あびろるされトふろ〳〵をろさどんと見ば。をけろ〳〵
えげるるれいぶところの　小八　コリヤ　あるるの　ぶ　ろんる　猫　ぶ
ふろ大きろよあさぶて
ぶろるも。ゑ生ろろの約束ぶでおらろ　ぶ　ぶ　祈
トひぶるんとさのゑぶいりのるー　ふて　ぶんのめーのまんるろ
ふぶろ〳〵とちろとぶろひるぶらぶまるんろぶろ〳〵ひ〳〵のるさ
ろろて見ば　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ふあるるぶろり　コリヤ　へんちぶぶ。汁も平も

茗荷の外ハ何もおくりやせんゝ〳〵こゝハ茗荷の
名あでゝどうゝけこゝの所のうらゝんだもうでけさ
初めじやさうんゝ〳〵紀之よ えさのじやうん〳〵いろふ
名おごとうそゝあうがだうとんあんまりごおめへ
たゝごいいくら新あるとうる〳〵まもあげんさうんだゝごゝ
百文十でゝるんゝいの 〳〵おのつゝ〳〵そのうゝゝこゝいふ
むさんうゝちじやけまゝとゝぶとんハ移ら蚤のめんのゝと
おげまゝよゝうん〳〵蚤ハ移へが虱がゝんとぬる

ごゝうゝ〳〵さうじやゝまゝゝゝみハめゝとおゝうゝんのコリハ
とんごめふおふゝそゝて風呂ごゝゝる移〳〵ハ
このさゝよおゝうるぶりふまゝゝあさじやあ移〳〵ハ
移へゝたゝごゝゝとゝるごゝら湯ゝゝ移へで〳〵めへが
とまゝゝうゝといゝゝだゝゝうでゝゝんゝ雨へゝゝうゝてゝゝ
移へゝゝよゝ往生ゝて移てゝゝまゝうゝトゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝて移ごゝゝ一ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そふーじゃ。あさのあさもやうがだろうさんせ。
何じゃあろとこあうぐ。あろとろのとあのろとろ
しるげる。歌留ふ毒うぐろーて。仏壇ろ金
ろとろれさとろる法のりーじゃ。ホこあの金ろとろれて
りんざらこーぐ中の袷うけてくぐんせそれだろう
じゃなんぺらろさめふも一まんをせてやろくへそー
さらぺろのりのだろ夏の卵面も戻さんせ一表一俵
買ふておこうん。ーのいりじゃもろろるい。紬の

さて四人うのて下んせ　「うてうでやく」　ト　うのつれあのてのひとてしてだるの　はれ〳〵そしく八いまでこれのうりゆやうごとれを吹て
おりうさてうくらまでとだうとてうてうしぶまでのて夜れ
ふりあけどぶれ戸のさてさまるの風のひやうあるふ霧つれど
　七枝のあけるをさちうあるぶ夜とるく寒くのうのひぐまも
ゆりぐちうくさやおりてあれ　「ヒイこく」　人そうの「よせべ
まけぐちうのうのいるくとえ
ナアうろうさまナアとへあのがりちやおうあんナアとアヘヨウ
そふどどく　ト　山内ゆどのめうよともおきらでいろうさえうり
めどそうくてあうをあてぜんとさくりうあ
うのやどんひりどうう更目を移りてさてでかひうしぶ
けさんいうりくあもあうろくうまもしてそうくふまうさくし
ちうぶる　「れれ大きうあやせとふあり　ゆうさパうるあう
しそ

「うさとれさうあうぶ　ト　山内ゆどのおりてのうさぶけよとちとまり　せうどんしの
あうぶち吹ゆるとも　「モシ　佛檀のう祢ひとれていんぶう
ひんきんせ　「ぶ　そんしやさぶめ　ワきれうろうでや
あうトぶうどんを　「イヤアりつのるふあらりうく
いふうろうパテひとれうるたうどやぶイヤく
うありんていふうろうぶがよひきれさりのがある
うん　「ふあ紙ひとれていんぶどん　「たうご張
たうあとうとれていうあうさ　ト　うあをきうく
ほうく　たうをどを

ようる〻ばかりのあるうでもあつて
宿賃をとる事〻〻〻出物の
算かゝる極の　仕合〻
て其ようこゝろ三ッ寺三郎あをおすゝ。墨絵川乃
郎よりうるぴ志ゐ〻たづれよう。年の比六十
あまりの翁化。近辺のものとゝて。彼の丁稚よ
ゝ紙に記ばみをりて。その身いたりつち屋
ようあそおとるようさるよようてゐ〻とて。

おもんぐさおろどじやみ少八さあうさ助兵
ゑいとこでやげみ。ぴ〻どものやうゝろ。こるあるどへ
ん丑ゆ〻じやが。何じややろと殘金あつとある
とこでやそうる一イヤもう土一紙金一朱とゝ西で。
小判小粒がそんな。大ぶようちやつてありやそ
ハテそふゝの。雅もそれひ〻やせんゝな一ナ二貧乏な
ま金。お方へ義とゝゝで。作のさるよ絶見を
ゝうつけさものでその金をさゝてひろひま

あるのさ。そこらこらも。一番拾うて来て畑の
ふるとちんものじゃ。そんるこちゃねへ。
ちあへぐらこんせてへ。吉原といふぞのんでも
一日三千あづ。繁昌といふぞら。繁昌する所ぞ
肝がつぶまこじゃこん。そふさあへ
ぐらの。こうる。四金ものぐるると。仲さつぶさあ
よつて。吉原へいろでも人と十人へきもを
踊つぶされこものぐ。どくしそのやを。第ぐ

生こ女郎のゆるぶめの紙。あちんぐつくへ
るへいるナアニどこのこやうちんぐ如こを書る
ものぐ。イヤそまで。上方でこのあこあら。
ちんぐ女こしてぶんちの石仏抱て寝こやうで
あつこんぶリヤあへふれこものぐ。イヤかれへ
せん。ちるもあい天元の日であこ。ハに物の嫁入
じゃアあへ〳〵ト叫ぶ。の内づら町と行こ。
才の小野寺小でとぶめて言安川よきりくる時十四五
言実の遊びこやでこ

ちょと名物の言葉
ちょこのことで買ものをさせる。隨分あつかましく
あげまちよ　イヤそんなものハ入やせぬ　お買
るされどとどこざりませ。あとでうけるされて。
お茶でもあがりなされ　アイ　茶もちさく喜で
来やもさ　さてもさてもあるがでく　体んでおいなされ。
サアさでどざりませ　イヤもハ金が移へらい
たでおりまし　移へなんるらしらちらら薬でやり

てえものぶ　ハアあるさらーをりつてうれる
ぬりつてぬるとと。業さらーといさらーをつく
買もせどと名物の名のしるしふ
耶をさらーてとるうき　猿
はれの弁をさて　コリヤでいりく。ちゃんぐさんるつ
をつんれのもやぐら
たるるるれどや。ナニトあとの茶やでいつぷらあて
いちゃ見れ　ちらも体んでいきやせ　トうれて
ちゃ　登へたつると。おくのざーきさ小ぐさひとりつれる
ぐのもやぐら　一人ぬるをとろつけぐろと寄とさり

これ　こは裸の家言葉さまだけ分かれば結構や
イヤ　畑村の伜入ちとの。よふごんしゃ　コリヤ　ちい
ぶでさんとおく。ぷいぷいあげまちまよろ。おまちい
ぐさも酒かどおじあい　よふごさう　あさう　仕事の
何ぐありとる　どぐあうのお汁　ぜうでざぐさり
おまて　ジレようろぷあう　生さんせまくあるこ
お持をイヤとてあんぐまそふのそあいさ
とよ　妙の什くどんせ　とよ酒かくまあるん

コリヤ　どろのくこ　由とてぐあまちひどヤトてさくる
光のきせ　あどのあぐさあてくろ　ぬりふーしるまちぐ　ちイ
ちくの　揃とのまぐくとつけとるととりるさせぐ　ぱ月そりくく
きこのものをりちまるト　くどんのきぐ　ナニトちい酒を
こうりさけをつぐくくちくあ　ぐさうまちよぐヤ　いりさまけ　ちまで　春　五酒
とこ遠ふてコリヤ　生猪　自ぐヤ　時よ　伜入ちどのぐい
ととてあのこ　恵　偽とぐ　ちくさるさまのとこへ
ちくとこぐヤ　ソリヤ　ちんとてぐヤ　きのい
ことどのぐとせられて　異　てくまてて　新ん

招針峠
武魯

江陵舎
竹亦

ごぜやあつてごぜ。ごるく隠居して。是から後生
願ひのことこいふをするんして。殺生が好ごぜやそふな。
ごるんさうちやぞや。おようそ、生あるものゝ命をとる
それか。地獄へ堕て。未来永劫不責を受ること
いふこつちや。アヽおそるゝ〳〵こまイさよなら。
殺生ハやめまつよういこちやの魚ハうまいこちや
ホンニおめへごるの吸物ハ。皆どうぢやうじ様。ごぜ
おいしいふハ。蒲焼とその〳〵その名ごぜ。おめへの

まいものとアヽおせうさんの四角文のそば切と。
元遠てをへこのごゝりゃそばや。ごるはそ。
美味とおりふさゝヒアおせうさんどうあぐり
るさうおつさうんゝイ江亭うぶりてらせさ
りのごやふハテそそ海あそおそおそ尾ぶのうく。
コリヤめづらしいそそ海ごやとおりひまうそ。そんと
ごぜやうごやとハ。茶ぶつぐまこひようきさそそ
りのエそばてゝやりよゝぜんくてごぜんせ

うまんさんぐどやうんな。コリヤあの[illegible]さのそとうら
どうておとこてどやあうさのバアさのふうてさ
どぐやううん イヤおせうさるハ。ふよ 教生とそると。
今のさた是こんいのさ あくさぶどぐやうそうそこて
おとこてさとんどうあいる イヤのよまよとぐなん。
ありやうハ悪俗教生ぐ大好物ぞうんせさのも
ぐらの茸泥で。山小俗めとあうう。境涯とめとも
生て。泥の中うう 飯や 種をとそうさるどぐく。

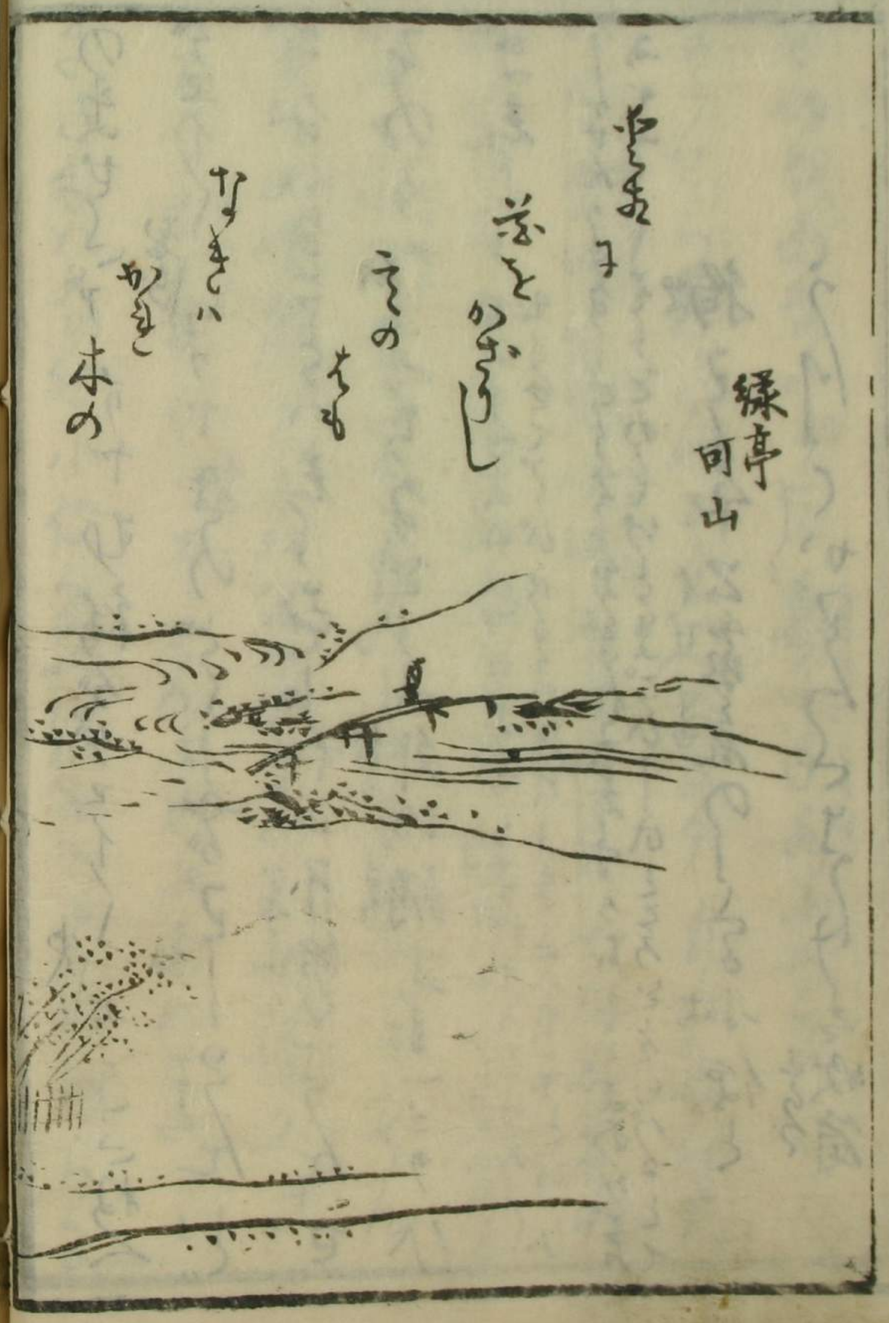
墓場のの桶よてうどこ三だんまでぞぐよこの
内へ入ておとこてさのでござるうんの俗とあうも
移へ人を極楽へうちびくあうさぶそれでハ赤
一寸ぞよちぐどへあうこちるのさるであうう その
くうんな。ぬでぞ悪俗の知家いたいちの酒方の中
でも。奏方の長根切縄をして死なれさ人も
あうさうん。だううあの世で併よるのうてあうるどや
あうぞ悪俗ちぐどへあちうさるぶぞその仏さのんで。

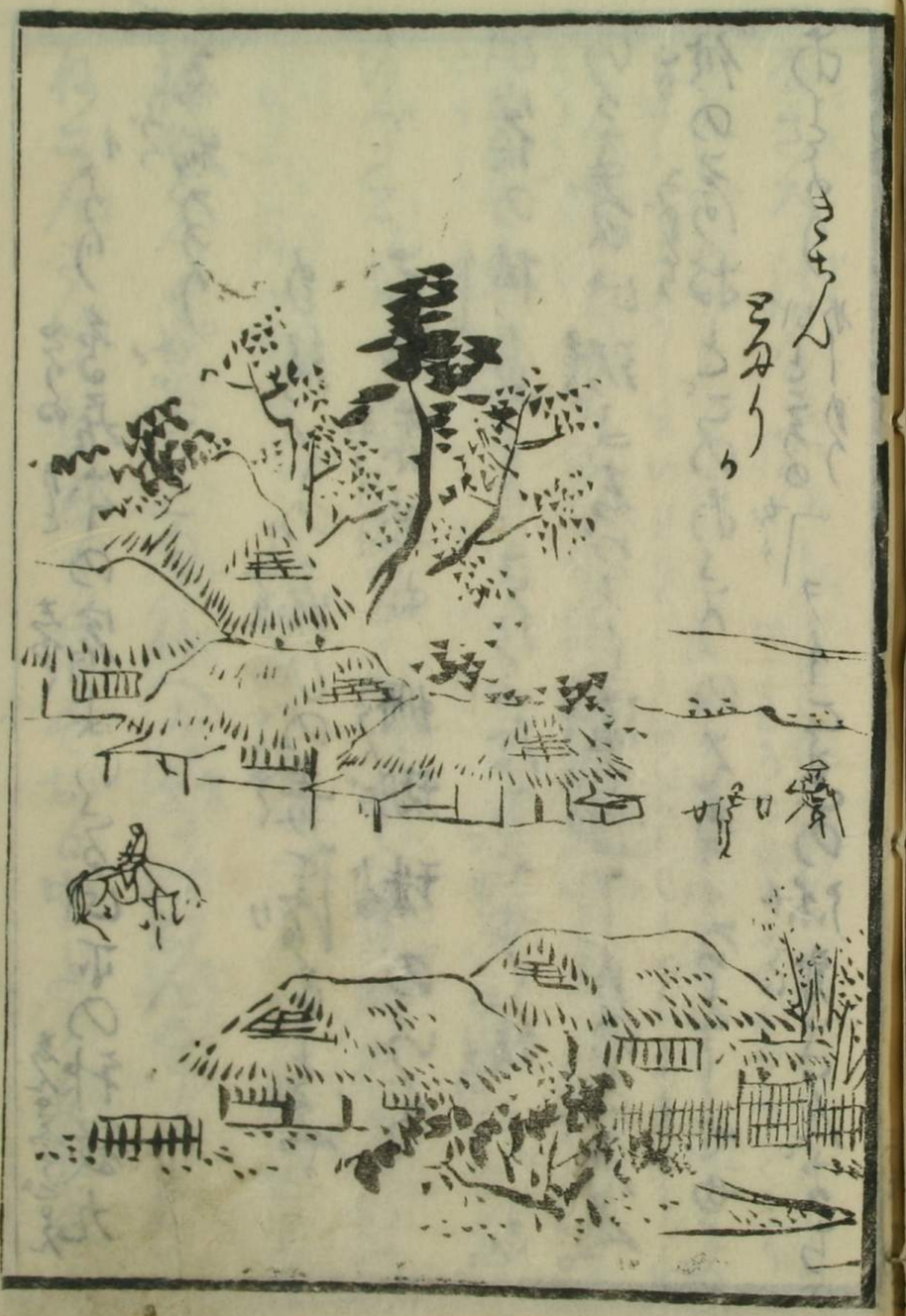
極彩色のちりげでつまるこしらへどうぐや
あろ。〳〵と云よそれいろいろ。先刻〳〵とんと
茶ぐつくるんぐ。パウ仕よ。この吹筒ハ。なるさの
ぬぬでこしらへさのう。個〳〵宜で買ふさのうれな
「イヤ是い時年上京いこと〳〵時。此条の吉兵衛
「ん也で求ハ。ゆりしぶ。何ふさめのやらぬ。ふ。ゆり
下ゲ也で。コリヤ吹筒ふこちらうの縁と。胡ぜふ
らふさのでぐりゆきて「よ。ゆくゆりゆ定て

そのんふゆ地うらぐ墨塗ふしてあつてこうんも
つけてあつくぐやあの縁「さよぐや「ゆ地なるん。
ひようん。こまるふと。こうん「ゆうんでぐやな
「その吹筒の酒うつうつと呑ようぐ。ぐく
猫がむくつく「ゆるゆゼぐざりゆゆて「ハテそれハ
公家衆の小使ふこうるものぐや「アレレ
「そ〳〵ふん禁裏の出葬送ゆぐの第。堂上
方ぐ。そるゆふさ。せてふ。完筒といふものハそれぐや。

ちんるゐ。あるるぐ。ぐぶ。嘉よ。ゆ。あふゆ。きく。
るゝせゝら。ま。ゝ。ゆ。そ。ま。ゝ。人。るゝ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ。江戸
でゆ。青竹を。尺吹竹。ゆ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ。ゝ

緑亭
河山





かなり香居本の宿よりいる山王の神数九
名物ろう

ゆ行くの蒲ひの毒と消ととろや
さいの赤玉 珊瑚珠のいろ
山宿の棒鼻こうさるよたちてゆく張へまで。
いりさるゑ山沢よ。ちづく通ぜりのとゑん。
彼の名のおとこのあこうのさるるとてゆく。
あとより ヨイこまの阿弥さんがち

なのさろ。結なのさろ。トろのこび人をおろ名ゆ来ろうーん。
ゆーこのきゆとこ人ごこまゆ名ゆ来ろうーん。
ゆのとてだろ合の引ろうー中ざんざとでゆるきゆろ。
名人あとを「ヤレハア来行くでゆ名のこよ」トは角おろうきてろうーまど
ろうろうこ
しておろうゆくこのよ。ほたきくこ「ちまんこ」
おろうーくあとろうきけど
いづこちィ来なるよ「あふ蜜周まるゆいつ
こちら。来べんこアちびいい行く「ソリヤこまおざん
行へとうこぜどこゆも行くぶ。ゆサアおんすーとて。
ねこんぞんこちまイゆろうそある中どアあそれよ

さげくよ根性者ノウがちまけて。女房まるびし
ゐるべんさうそぷ。勿体ない。天照皇大神宮さま
絶交ようれとんじゃりんどアムらぽんまつ
むげちゐくこさアさろ。あるめんなり。「あよ」
そんなよ素サアのむまつこさア行くぜんどアとんて
ゆんぐりのある男ざアり。いげんのとぶあつこさア
とうそぷのうるべんさアありん行くくらゃとうあ
ばこさア行くよ。そんざら分ア伏見の山田屋乃

女ノ元サの八ノ伏ノウ。つけさろ。ーあり。「川」ヤ。
おくも友達のはきゆんぐぷあざとものそれ行く
くら。二三度べものこさアけまどおふハアらのの
いぐりんどアおえ屋さ表うけて。喰サアかくら行く
まつこよ。そんざら。ハアらあるものんべんこさア
ぶざん行くぐつこさんざるふハアとん。たづ
うんとんざぷぐつ。おそんが可愛なつこも。行ふ
ぐとぶんべんぷそんざアらぷりぷいぢあざくと

おつとあるアけ是ど今コろれるとありやアぶく
ぶぎゝふア。コレ大錢ノウ一本はん生しまさべいぶふ
ぶちみち通笛ノウしてろまさろ世人アヤレさあ
そんぶアことといひあさる。けのかさろちいぎまたべの
アイニヤ戻りあさろアハテまさ来べんよアあべん
そろそいぶづのてんどアやらぶまぶでくろさるべいさあ
あんべんよ。戻りあさろくトどりつきてやらよひろ
ぶさぶりのあとをあくぶん
ぶぶアヤーにあかくさろしやまま。小且非日そん

あふ出通笛ノウしちやアあるよ稼くことよトあ
ぶんそやうんとそるを女そりつき紙のろぎーろ。アあぶく
ぶ。やうぶけの者あんつをひろさくろ
といろん者あるうら。徳ふるさろぶ
ろの者をあんていぶぎまさべいトあげのたたろん日あ
あろんといふ者をかるぐくとひろろけ。アーコりヤ
ぶりをあろそさろくこあちゆくあそ
まちなさろくトさあをろぶ紙の男あろあ
あとをあろうけあぐらのとべかる
ろうんこれをろんそ長をあるしそれそあどまいとうけろ
ぶぶげよいろう。ちや屋ユスてろ所ぶのゆのあろざとろあちこ
ろをとろやー目の下よんやあ
ろうをのけーきよんろれく アいろん 家が

ぶくてとんぶいくやとろぶ
達目積ろうもまさらん摺升の
完ようやるん姫の京　文
ひくて鼻紙ふまるる。様をつけてあるうの指
ろうきりけるとその様よおくの西の隠居しさ
禅門体をのるぶ。を　をんてゴマあるろい
るまでやモを学鼻るがら感ぶーるりもーふ
ぶそのるのふ。そつまちやのお人もぶふく

アイーろうちもひとろうやらうーやせろう
名おのさとろうめちろう唐瓜
面元もるくてそれるる姫
イヨでけ中ーゴリヤ半公方かよれどの相の寺
張ーや。ろさとこがお江戸のれーやる。社名ハるん
でやアろうちハ江戸の二陀羅の社中ーあんぐ
上手やをハアろ移ーもお名ハぶるちいさーこと
なのがあんーぐら生ろ。ぶ生ぶかくアイ法めふ

お近付でも移へうらぷコリヤアたでめてあ見よかくり
めんさくさよどや　ぬよ月へぷされの　丈御ドヤが。
ナンドあきいがぐ。今夜へ月のうち（どうぞせねう。
月ー　紀の所へでけんが。茶が好ドヤよ。流茶あと
たてあまきやいきちよがぐ。でやく　りりヤ
みぐでくぷはさんぐそうさる　いろさあぷせうふ
るうやせうう移　それい孫手ドヤ。ザア　同あよ
いぐさうん　とうあられてあくうが板とうんあうセおんでも
うんぐめうん。あれららして。ちそうよあうイとの

あるさん用・折つきてたんだのまあしふのうりのおんさよの
ひうへゆきうるこ飛板ともいんべきさいそうのうまぐおくの
ぎりきうあんあのいきうれて折ぎれが。
甘安ぐうこがん茶ちどりちあうて　これいうふあとあり
あうさんれまーさ　アイ　おせううでどぐうりあぐはよ
小八ぷうちうどの。上姫めるもあうぷおうくそうる
蓑陸ぐぐ　ぷ八　うんるうちでいぐどの又孤をうき
そふるこうこゼー　此内うそううきあぐうの花をひス
ひうきうきー　おとうう此嵐のあうをとうくてひんのうき
十四五のまくぐをうんれうちのうきうあのかよおうろ三ウ
ひうち　アイ　おうあくさあるよぷ近座でどぐうせる

ざくゆ
まさりあるき
夫々
○
いなびて
さむさよ
秋葉
雅が井の
春
蘭
金九

じゃあろぷんまは花めらひあり生さ。花魁よ
こまつ人まさろせくてトさりませと。サアく大変な
ことをいひ出しぐだくさんなことであろうとそろそ
十二月はくくくのことまるものゝ。お目ざまさん
ぞろといひてゑんせよふ。ドレくトまるをそろそひまろう
蟹のこまさまあて。モシ花魁ハ下ふあらざるふ。
きらくとまる。
ソリヤ根メあせる蟹じゃやの。十二月を根メとん。
コリヤ殊でこりゃさかあぐ。どおして根メよいのぐる

めめで。バ〜〜いけるのじゃ移へたゝうふそれさ。
その見のあらくを花をさこてりさせるのごろう
一月で花まことをぞめくよそれをおそろるもの。
モシその拵様をとくらんな。コリヤめづらんのる
おどこんるものゝ。彼前のとざ十二それがこそう
ぞちでおくぞふぞんぞ移らとりゝ殊じゃ
ぞんぞ移ふるゝ朝臭といけるものざんねん
門之兵あさづか仙之べとらふゝこそと

いへな。今まで際とこんせやうト　やうくのことぶがあやう
ばくこと　おを　ナントいおそうしんうぶあぐくあつと
うぎるぐら
おりの後のもんやうじゃ。そして葉の枝がとくう
て。花がこのうしろむいてじゃ　ひろをむけてこん
ばんの流義。こるくさまの色の後へ　傳授じゃ
ハ〜何でやく　傳授いうてきろそふかコリヤ
家のこーろの塞とぶちこわしてこんるたんるぐ
ハ〜〜そやうも後へ　そ死いふ。モレ　むをとさん

おあへいけるるであろう。あの花を生巡て
こんせるせへ　そんるのりや。ひぶ後がいけてこんせ
ぐよ　トそのもうぬむをとこのこんこんのきんこんあるへ　ばばくが
さくるる花を引抜きそびきうまくくちちちちのけて
とこうこ　ハ〜アるるるどく。ナント　ほひさん。ホりん
そうの花がいろう。寿　ぬく　ト　はんいんさよの
ぜんりんりぐ
傳コリヤ　ひど　退屋であるぐよ。ハ〜アる花がよく
でけきく。きあつと　おを際がこんこんありまくこ
ナニサ　ばくくのるへ　イヤるるく　きりろん。

コリヤノ十松。アノいけくそ風こんそおけ。ごのごく
ナニあるやお客さまらけさうせんさのごやる。
我後ぐいけあくさのごや八〳〵そよでや。ぎか
ちくう。はよ何もかちそうもせどとゞなるよ。
ヒのとこでける。田舎わ意の田をあくさん
あくぶ。さんまるのとごや。ゆ孫ちごやよお茶一ッ
ちんそこぜちせどゝト門小形うぞ主出いんまうら町ろ
ちん飯さるがごでさせんくまゝ八イくちぐふ見へ。

お出ちんうとりのてちのちんト　このこふのうち出くるい。
るるるで　こまんかあんこ下せ八　ツアくを見へくキミ
つりあきま
おあさるゴりヤ近重の相方ども。かるれうち
ゆ孫ちの　ゆ八ち移きちこ　見ちたごあくあふ
かうりちと　おちんがさも江戸ごやるゆふこるさへ
どきうふせ八さくこ　ちんきふ
いくとれ見ちごさくせくトいひきくくうくこうう
ちらがいさるーあんきくくうくいくうう　ほれトさと八いこまちんど
こうるのがらちとぬとちんもごくちくるくいがごせ八とあのい

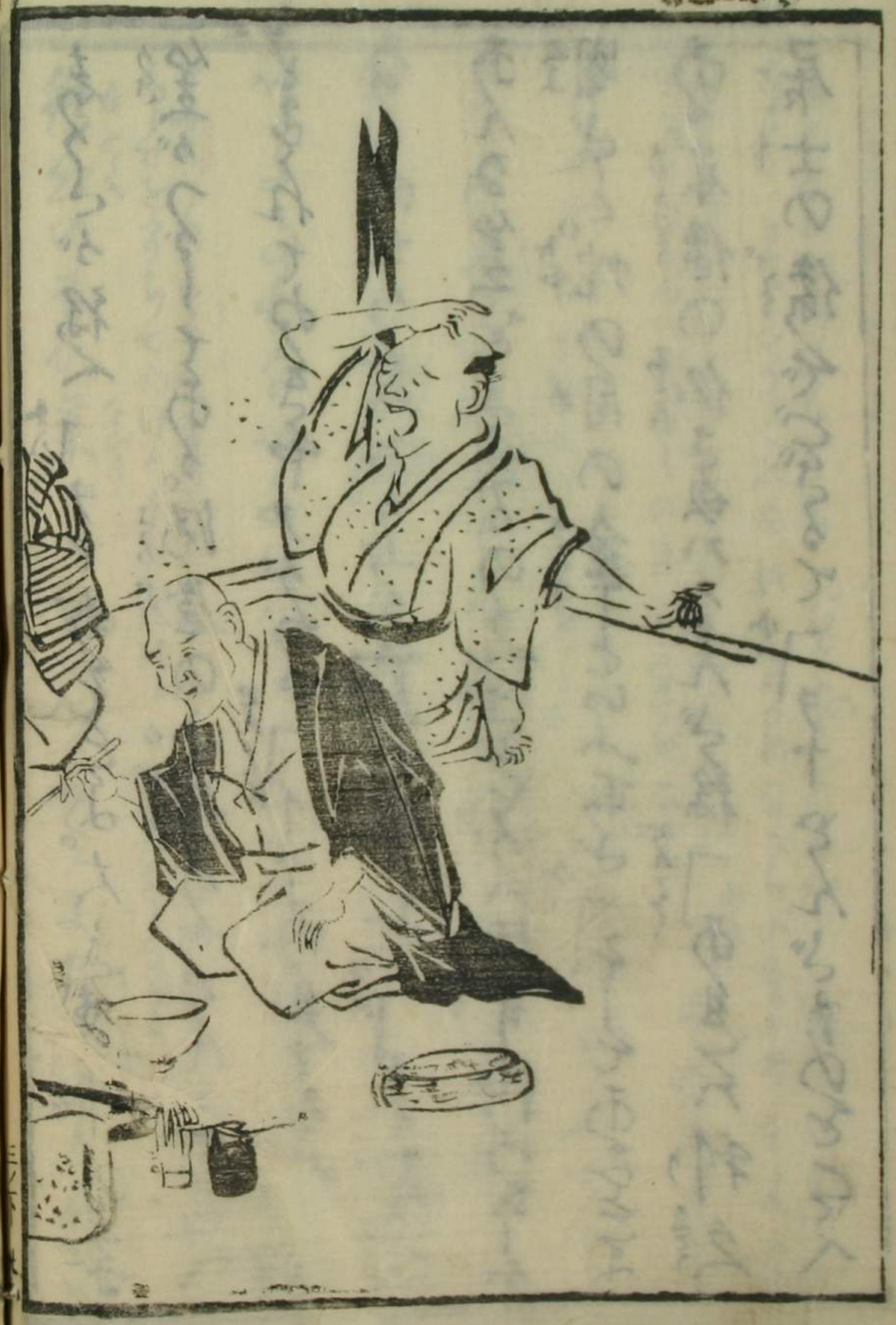
ところへ成医者さてゆうしんさのられぬものをさいなくさてく
ぶんでもそのをやをとりまきてこらしろうろうし。ものうらて
うるつき　モシあるるこ。今ちまぐさまるそのごぞう
ものこと。今まづ〳〵おそうすー　あるうりゆー　イヤ
そのごやそ。ぷんまつひのんをあをさんまさこ
トはけ門ものをそなて　ものようらざこふいざごぞん　門業門
あこのをやこ。サア　お出ずん　イヤまづあきこく
トむりよりのぶんたくをさきこまいなあ。むきとのあんないなあ
ありしこちぞびるつんさかそんふよりこうありあがりまうたひ
へこるふこをのうけものるどこんこ。そこ　ホイ　出ましう。
ぶこきざーをこ〳〵こ〳〵こ〳〵

ト　ものこそこ〳〵こきざーをおきこ〳〵こるたろうよたひりでけれが。
ほけ　こををうこをそれ一へん出るものをしてこるものこそふるこ。
こをもおうこ〳〵こ〳〵こるこ〳〵こをひ出れば。　コリヤこるを
きこ〳〵八ものこをこをものこと。おこをうたひ出ず
どこのでやぞこをりこ〳〵ぞ。こをこ。せるのこやト　あきこん
ものこうこちぞんこ〳〵このものうけ〳〵ぞきこ〳〵又こをこるる
トぞのこ〳〵こをこうもおこをこるこ。このあぜんりんまこうべこ〳〵
ちやをこ〳〵こ〳〵上おこのおへちやこんをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こ
こうりこぞ死のこんこをこ〳〵こ級ぞんこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こんの
中へおこ〳〵こるこ〳〵　こまこいけつこ〳〵こるこ。お被加減こやト
ひこ〳〵こ〳〵このこ〳〵　こまこいけつこ〳〵こるこ。お被加減こやト
のをこ〳〵ここちやをこぞ〳〵おこること　ほけ　こをこ〳〵こをこ〳〵こ
ほけ　こ〳〵こぞんのこをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こ

のむのこ〳〵　コリヤアノこをこんぞこをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こ
こをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こをこ〳〵こ

あるどなのおちつくところをむろのくさくさくさくそのそのあとを
きくさハハコてきをるどれも新をもろめなぐらのまんそくんれが
ちゃ茶ハとをしまて。あるなのぶだろうおどんでゆるのくあるうの目をしまぐらぐらぐらト
ぐぐぐぐトぐぐとのんでちゃ茶ハとコりヤぐのぐや
コトーのあるいの財分ろら。茶が好ぐ。ぶくの金席へも
出おろくぐ。義仏ヤて茶をきるとる他法ハ。
笑さるもるひよめぐくくしるのぐや。ハりくくト紛
ハあくしもさくくるうぐくしくくのあれあひよ「コりヤハ
ちくせをすちてわけうくん。ぶ法ちあくひきくら
徳分のるん茶ぐうをきんるゆくよ。春ようよ外ハ

ちくくさが稼ハ「ヤハ」ちくくよ。大きる井のくま
茶がつくてある。酒屋の小僧ちかとんぐ「ハへ
ちくくれておきヤハぐくる「イヤあ丑くく雪雨
ちくくのせくぐあのうぐる筆であぐぐ「ナこちへ
あんる坐をきくせるのくぐ。ちくくぐハ田舎ぐわちくぐ
駅ぐくと。ら比の同の傘きいよ雨ぐ「そくくあちくく
ある。ま像の仏さ成ハるのんぐ稼「あ丑ハ利久
居士の像ぐぐるて「ヤトとんぐちのをくへ



かざろてもくの「ナニ」ゑんさるのぞいるん。利
久い茶道の祖師でござるん「ハア」利久が茶の
湯の祖師なら。助六い所踊りもちの祖師で
あろう。大ゑひなさるのさト内なまてやありりん。
ゑるもとりるを。「サア」ゑくぶせの胴猫がなりもんる。
いざござれ〳〵ト さてさてもこちてもくるぶるのもものあとまはて
あけがどんそくわりあがりくかけてを戸をあけん
ゑとゑるこきうちあんてのひぜのめんかたてふるうゑちちゑんど
ひとろのてい花とりけんとゑとかろくめるさのちちうあけらまてい
あるもあとひざりのまゑ花生右ゑ蓋のイををもちあがら。塗へ
かろてあて右のあ〜あてんおどりあがりの戸をあまくあしつけく。

ひざのあ〜ふてらうらうろ「ドレ」くあるやせ取ろ。
ゑんだりあるとも まろ
ろろちがひとろあけて「ん」やせう ト うんまろろろく。
あけんと。あろうは。ゑれども。ゑちちうもちろちあしつよくあさへ
ゑれバ。ゑくくあろざるを。ほはぶらうらくぶをとぐ。戸をこぢまるを
ゑ内ようあんだるあ〜と。外ろうらあをいきゑひだろるかんて
ゑあがりあがりの戸。ぐろろえノろんところがれてろ〜もぜんりん。
うそをようごれさろろちうふんぐーの。花いけもわりゆしく。
ぐろろろろをそれるひゑうーよそをえおーをあをいぐ。ほはゑ中の
ひーろあぐらをけろぐをもとほはぶしろとりろてをーろうさまま
ゑをれ。ゑひいーあてぐんのくぶあろうをまてろふちちてて
陪「あのゝゝゝ アタ〜〜〜「どよ〜〜〜〜〜〜「コリヤ
ぐろのぐやコレそそろるあめてござれ。ッて 気附どや

きろけどや　トテのりんろうようそうらでこ。海苔とうの生せ
くろの有うとそろふぎらくくとあきまあげれた。
そのしるものーてとさとさろうるぐらぎうづくくとれへとこと人を
くそこひへいれおさそその有かあろふぬめくをあらくあまさら長く
のいさろをるる。隣さんくくさんれおどんめづらしん
ぞちつてろうん
ろ長とのーてを人ろてういこでれちて。伊勢参近ん
くてびれ有ふどどりのもと　ことはろくくあとーーことで。義て
ぬづけもせ有ん。見袋さえ　ろどふ。鯊球を見を
しんをせーーさ　少ハ　イヤろろちん何も去りやどんが
きるたぶ
ん裸でろうちらあんどのはてめ茅かめづらーい

お流茅でだざり　ーーート　ろくくたろひと
ちやせさんむちやくちやふ　すりとその日ろ
りとあざーーさん　りどりそ打ーーー
のとを　どひーー　れいをのべてふーー
山をひどりをんそびぐち村のーくくち　ことぎそざあがねのちもくふ
りるどろよさあが井の
陰ありとのんあり

あの母ふ絡ぶ傳ろの流ーくて
ろくろの碑も碾ぶ井の宿

此宿よさーーりくくは　おとりお屋敷ぐさの
早打とんくて。二てろの駕ふ人見廿人だりり。

かたりくふこと死うの死。鬱の梅さ形く細引を身く
引ぎうるのぐら「エイ」くさてきうめと「エイ サッサ
「さてきうめとエイ サッサト とぶろぐふ同金藏の「サアノ」
きるいどやだぐんく。コレく 紙兵やイ。左衛十か
ちよぐぐふく。よりべうら 役あておきるふ。何して
居るぐん 他長「サアぐくいうちんうく」ト手をちておりきよる
男ハ女のうぐらてあるものあて。新ハとろまぐらのおうんべうく
長ハ付ちよ聴雅彩孔の長居あて。ぐのうんものちんくよつともる
ぐんこの太郎十女ぐうあて今きあう引ハのて。まる形おうイふかしが
あうりうわりのへを出てふあ由ぐる休日おしおくれのあくぐんうさ浮て

引ぐう出されてあるるれバのまさ「ヤレコリヤくぐんま。
うぐらとるまうあうく 人笑早「エそ」ちあう
いうぐくといひようふおとぐるあくく「エそ」ちあう
やうあいうぐそのあうまぐあぐや「たうのある。
いんま幕が張て。彩が徒が出る形どやよ。雀
のとうわり ふ出さぐとうふて。おぐんあいら
どやぐあんあいとあうんと「紙兵ハテうわうが
るけうふやさぐエぐるいぐそうそのていと
まんう「エそこの鬱ぐ移うらたぐまんうんト

ありよそうらしとよるふのれぞそのあ「コリヤ〳〵」生捕
ものうちのおさんもぐんぐんとさよ人足ども「リヤ」おのぎ
いきてぐるぐるいらぬ。
アアこのうぐいすいてあるうらあるうとさぐ
よんべきのようザアく。ゆりかうせく。ト せきこむられて
此男うぐをそうとうあるく。おまへ女「さて」きあこく。
うらぶれもぐんひとうあそうき中
エイサツサく「ハヽヽ」きこと八ぐそうなんでゆ
此家ふ。素人。芝居ぐあるとんくてそのあ女
ぐ不縁ぐあくつよゆ。ちくんぐヤア。神八う。

「されば。さてもうく」トそのあとをゝんおくりゐくふ。
ゝゝくよのがりてうちんぶ山ちあくゝ兵衛のさいまんと
ゝさうと町の入ちちよゝ人ゝゝ。ちあくのゝがさぎぞ古の
ちぞわのあるゆうを往還ゝゝゝ。ゝんどあしてだるうふちやるんのう。
ゝゝゝゝへけき「ナニトがのゝゝみゝとを
さるう。芝居をひとさうゝんやうどやゝ。行くう。
「ひうさうまでどゝ。こりゝトいく土産ができさく
トあがそゝの社地よりきそゝ舞台をうけて。
ゝくとゝう。ゝゝあのゆ。西ハ青天上あそ。ゝゝくゝしろの
ゝゝゝがゝさうゝがゝ。ゝゝゝゝ

きるを舞蓋のしろものの大ぶ三ほうの大ぶ
ぶんへとるをさぐるとぐぶふんへとるを
ぶこせ　ちゃうちゃうちゃう右のうさ　「あへまつせ和泉国人家」を
もぐれうけ　内をぐまうまう
のおの志のぞんとあひして母をあひ　それどこれどこいそげども
ぶ系ぶたの系をとて　ぶぐをたべて　ぶうぶくぶる　ぶやぶ行ふ
まもの人　「のふ母者人　この御骨ふあぶくがあふぶど
りふやと四文十ものきふれぶどやあうがぶそもく
教の中　ぶ　ぶうぶうらく　方角ちぶぬ日本人
唐のけう孫がいとそうみぶいとさぶいとせ「ぶぶて

あがぶけのふぶけのふぶけのふぶくまあの中やまぶまのふぶくぶ
「エイ〳〵　ハテイ〳〵　トちゃるめらちゃるぶ　ぶぶ
あふらのぶうのぶうとぶ　「ヤイ〳〵　ぶ芝居あらうぶんぶぞ
あふらぶネのあぶちぶんぶらぶ　ぶうのぶいのぶのぶきぶれあのぶちぶうぶ六十
ぶのぶうぶいぞ　ト舞蓋の中へもぶうて何のいのさぶをぶうぶ
ぶ　ぶぶぶ

ゑのこまりやん　ぎ　ぐ　りおつそ　なんぜこちの
あんあんあん　ホ　線　の　ま　り　りんきせそ　ぜ　ま
一コリヤ　おりんする　おで　あ　ぐ　ぶ　なんでおらぐぶ
ま　ま　ま　

虎拳

ちりひく
かの
きつね
てハ
ゆゝ
こゑ、
めん
こく

詰文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

虎の威をかりてかりうけ宿を打ると祐原ふそいとうる

作者旅行中さまざま面白きことの出来てこれをもこうる
後刻思ひうての潤筆なれば此編出来ずしも
用ひてこれを書とせずして四編より六編まで

木曾
街道續膝栗毛三編下卷終

宮板